勇者のふりも楽じゃない

―理由？俺が神だから―

Hirou Konpai
疲労困憊
イラスト
さめだ小判
Sameda Koban

GAノベル

プロローグ

日本の大きな都市。
俺こと蛍河比古命は高いマンションの屋上から、大規模な工事現場を見下ろしていた。
紺色の和服が風にはためき、腰に差した太刀が揺れる。
眼下にはすべてを平地にするかのような工事。オリンピックのための区画整理らしい。
ショベルカーが道路をはがし、ブルドーザーが土砂を運んでいく。
そして、俺の御神体――今は道祖神にまで成り下がった大きな岩をも砕きながら移動させていく。
はあ、と俺は天を見上げて溜息を吐いた。足を後ろに下げると下駄がカランッと虚しく鳴る。
「千年以上頑張ったのにな……。俺は神になれなかった……」
俺はその昔、八百万の一柱に数えられたこともあった、れっきとした神だった
しかし、人間に媚びることをせず、傲慢に振る舞ってきた。
けれどそれは間違いだった。
特に江戸期に古事記を再評価した本居宣長の夢枕に立って自分の名を囁かなかったのが致命的だった。
なぜ人間なんかに媚を売らなくてはいけないのか？

イラスト
さめだ小判

当時の俺は理解できなかった。
あの天照大神ですら本居宣長の枕元へ足を運んでいたというのに。
古事記の原本自体はすでに失われていることを俺は失念していた。
結局、俺の名前は古事記から消え、流浪神となってしまった。
それでも、まだ当時は御神体を祭る神社があった。
だが明治の神仏分離令の余波で、名もなき神の社は切支丹の隠れ蓑呼ばわりされて潰された。
その後、御神体だけは道の三叉路に置かれて少しは信仰を集めた。
――が。
見てのとおり。工事の地ならしに巻き込まれて御神体すらも砕かれた。
人とコンタクトを取るのは不可能になった。
これが人に媚びず、高慢に振る舞った神の末路。
もう俺には何もない。
軽く首を振った。感傷に浸ってても仕方がなかった。
どれだけ後悔したところで、挽回できるはずはなかった。
「――帰るか」
腰に下げたひょうたんの水筒を手に取ると、自分の立つ周囲を囲むように丸く水を撒いた。
そして手を合わせて呪文を唱える。
「空と時を繋ぐ、天鳥船神よ。我が呼びかけに応じ、彼方と此方を渡る道となれ！　――

《異界神門》」
ブゥン――っ、と目の前に虹色の丸い空間が口を開く。
人々にあがめたてまつられる神になると吹聴して高天原から降りてきたのに、手ぶらで帰ったら何を言われるか。
考えただけでも憂鬱だった――ん？
「あ、やべ！　行き先指定忘れてる！」
次元移動する呪文なんて久しぶりすぎて、すっかり忘れていた。
胴体が吸い込まれたところで、俺は虹色の入口の縁に指をかけて必死に抵抗した。
「ちょ、ちょっと待て！　ストップ！　ふりいいず！」
叫んだところで止まらない。すさまじいまでの吸引力。
さすが今でも信仰を集める神の力。
落ちこぼれでは勝てない。
抵抗むなしく縁から指先が離れた。
一気に吸い込まれて、体がぐるぐると回るように揺れる。
目に見える青い空が、白い雲が、茶色い工事現場が、交じり合うように融けて遠ざかっていく。
「うわぁぁあ！　やめろー！　やりなおしさせろー、ばかー!!」
俺は手をバタバタさせて抵抗したが、一度発動した呪文の前には無力。
どこへ行くのかわからぬまま、次元の彼方へと飛ばされていった。

一章　異界の神になってやる！

緑の木々が鬱蒼と生い茂る森の中。
俺は意識を取り戻し、目を開けた。
見た事もない木が生え、花が咲き、虫や動物がいた。
「やっちまった……」
俺は起き上がると、和服の懐に手を入れて歩き出した。
森の柔らかい腐葉土を下駄で踏む感触が心地よい。
――まあいい、呪文を唱えなおしてさっさと帰ればいいんだ。
そのためには清らかな水が必要だった。ひょうたんの水は使い切ってしまっている。
「陰気な森だな。泉か小川があればいいんだがな――《千里眼》」
俺の目が光る。遠くまで見渡せる。
――が、森が深すぎていまいちわからない。驚くほど広大な森だった。
「仕方ないな。どこか話を聞けそうなやつは、っと」
《千里眼》のままでキョロキョロと見渡す。
すると、一本の巨大な木を見つけた。他の木々よりも二倍ほど高く、胴回りは大人十人が手を広げても届かないほどに太い。
日本なら確実に御神体になってるレベル。おそらくすでに意志を宿しているだろう。この森の主と見た。
「よし。あいつに尋ねるか」
俺は森の下草を踏みしめて歩いていった。
大木の傍まで来る。高さよりも横に太い。堂々とした構え。
上から下までじっくりと見定めて、信頼できるやつかどうか判断する。
よこしまなオーラを感じない。いいやつそうだった。
「なあ、ちょっとすまないが、この近くに小川か泉はないか？　魔法の触媒に使えそうな清らかなやつ」
すると、大木は向かって右側の枝をざわざわと揺らした。そっちにあるらしい。
「ありがとよ」
片手を上げて礼を言うと、教えられたほうに向かって歩き出した。
しばらく木漏れ日を感じながら森を歩いた。
人の手がほとんど入っていない原生林で、苔むした木や岩が多い。
下駄の跡が点々と地面に残った。
そして、俺は森の中にある広場のような場所へやって来た。

体育館ほどの広さがあり、木々が生えていなかった。
暖かな太陽が真上から降り注ぐ。どうやら昼らしい。
芝生のような緑に覆われている。広場の端には清浄な水を貯めた小さな泉。
「ん？」
俺は足を止めて、首を傾げた。
泉の傍に巨大な岩があったが、そこに鎖につながれた女がいた。
腰までの長い金髪に青い瞳。大きな胸にくびれた腰。大人のような色気を持つが、どこか少女らしい青さを感じさせる。十代後半の気の強そうな女だった。
スタイルはいいがたぶん処女だな、と俺は思った。
しかし格好が珍しい。
ゲームやマンガでしか見たことのないような（神だって暇つぶしに遊ぶ）白いスカートに白い上着。銀の胸当てをして、細身の剣を腰に下げている。
いわゆるファンタジーに出てくる女騎士とでもいうような存在。
首輪をはめられて岩に鎖で繋がれた女は憔悴しきった様子で座り込み、ぐったりとうなだれている。
清らかな白い頬に金髪がかかるその姿は、儚げなほどに美しかった。
――ま、俺には関係ない。
知らない世界だ。へたに関わると面倒なことになる。この女の抱える問題が面倒なのではなく、

この世界の神の機嫌を損ねることが問題なのだ。
この世界にも神はいるはずで、女の様子はどうみても儀式の生贄。よく見れば女の周りには酒瓶や果物まで供えられている。
この世界の神に自分への供物を横取りしたと思われたら弁解の余地がない。
殺されても文句言えない。
……それにもう、人を救うのにも疲れたしな。
当分、高天原に引きこもって寝て過ごしたい。
俺はジャリジャリと下駄を鳴らして広場を横切った。
そして泉の縁石に足を乗せた。和服のすそが割れてふくらはぎが露わになる。
それから腰に下げたひょうたんを手に持った。水を汲むため。
鏡のような水面に黒髪黒目の顔が映った。それなりに整っている俺の顔。
すると。
女騎士がはっと顔を上げた。美しい金髪がはねて整った顔立ちが露わになる。
「あ、あなた！　旅のものでしょうか⁉　わたくしを助けてください！　今すぐに！」
俺の眉間にしわが寄る。
――それが神に対してお願いをする態度か……――え？
「ちょっと待て！　お前、俺の姿が見えるのか⁉」
「何を言っているのです！　だから話かけたのですわ！　――もう時間がありません！　早くわ

たくしを助けてくださいませ！」
女騎士は身をよじって必死で訴えてきた。首の鎖がシャランと鳴った。
よほど焦っているようで、丁寧なのか威圧的なのかよくわからない口調になっていた。
俺はとっさに考える。
神の姿が見えるのなら、そういうふうな世界に作ったんだろうな。
この世界の神はよほど自己顕示欲の強いやつらしい。
そんなやつの供物を取ったら――。
俺の態度は決まっていた。
「いやだね」
「な、なぜですか――っ！」
「どこの世界でも鎖につながれるやつは、悪いことをしたやつか、繋がれるだけの理由があるやつだ。そんなのを事情もわからずに野放しにはできないな」
「――うっ！」
女騎士は悔しそうに赤い唇を噛んだ。みるみるうちに端整な顔を歪めて泣きそうになる。華奢な体が細かく震え始めた。
少しだけ同情する。
ていうか、うなだれているため細くて白いうなじが見えている。色っぽい。
思わず軽口を叩いてしまう。

「あれか、畑泥棒でもしたのか？　お前、食い意地張ってそうだもんな」
「そんなことしません！　――わたくしは、わたくしは……」
女騎士は言いよどむ。
その言葉すら言いたくないといった様子で。認めたくないらしい。
けれど女騎士は顔を上げると青い瞳で俺をまっすぐに見た。
「……わたくしは、何も悪いことはしておりません。ただ『咎人』として生まれてしまったのです」
「とがびと？」
「はい、生まれながらにして悪い存在と言われています。この世界の大半が魔王の手に落ち、世界を救うべき真の勇者が生まれてこないのも、すべて罪深き『咎人』が生まれてきたせいなのだ――と言われています」
「ふぅん」
俺は首を傾げた。
この女、気は強そうだが、悪いやつには見えなかった。
むしろ、清く正しいやつに見える。
俺は目を細めて、じっくりと女の内部へと目を向けた。
物事のすべてを見通す目。
――《真理眼》。
俺の目の前に女騎士のステータスが浮かび上がる。

【ステータス】
名　前：セリィ・レム・エーデルシュタイン
性　別：女
年　齢：17歳
種　族：人間
職　業：咎人（＝＝＝＝＝）
クラス：騎士Lv5　＝＝＝＝＝Lv17
属　性：【光】

【パラメーター】
筋　力：10（1）　最大成長値25
敏　捷：17（3）　最大成長値30
魔　力：19（4）　最大成長値75
知　識：12（2）　最大成長値50
幸　運：02（0）　最大成長値03

生命力：135

精神力：155

攻撃力：107（37＋70）
防御力：089（44＋40＋5）
魔攻力：165（50＋50＋50＋15）
魔防力：158（43＋50＋50＋15）

【装　備】
武　器：秘匿銀の細剣（ミスリルレイピア）　攻＋70　魔＋50
防　具：秘匿銀の胸当て（ミスリルハーフプレート）　防＋40　魔＋50
　　祝福の絹服（グレースドレス）　防＋5　魔＋15
装身具：継承の指輪　思い出のペンダント

あんまり育ってないので、スキルは省いた。
なんで他人の能力がゲームのように数値化されて見れるのか？
理由――だって神だから。
昔はもっと違う感じで見えていたのだが、いろいろゲームをプレイしていた時に、こっちのほうがわかりやすい！　と気付いて真理眼を修正したのだ。

まあ、それにしても。
能力にいろいろ突っ込みどころはあるとして（例えば筋力の数字の横（1）はＬｖが上がった時の成長値。こいつ1しか上がらない上に最大25と、明らかに騎士じゃなく魔法使いのほうが向いてる、とか）
とりあえず俺は属性に注目した。
――光属性。
意味がわからず腕組みをして考えながら呟く。
「どこが生まれながらの悪なんだ？　珍しい光属性じゃないか」
この世界はどうかわからないが、日本で言えば一万人から五万人に一人しかいない、稀少な存在だった。
こんな経験はないだろうか。
町内会議などでケンカになりかけたが、近所の明るいおばちゃんがやってきたとたん、会議室内の雰囲気まで明るくなって、ケンカがうやむやになったり。
学校でとても嫌なことがあってイライラしてたけど、とある明るい店員さんの顔を見るだけでなぜか癒されたり。
めったにいないから経験してないかもしれないが、いるだけで周りを明るくする人。そういう存在が光属性だった。
そしてこの女騎士も光属性。

世界に害をなす罪人とは、とてもじゃないが思えなかった。
女騎士はうなだれたまま首を振る。金髪が力なく揺れる。
「そんな……わたくしが光だなんて、ありえませんわ……。生まれてからずっと不幸で」
「ああ、うん。不幸そうだものな」
幸運が2しかないからな、とはさすがに言えなかったが。
女騎士は長い長い溜息を吐いた。もうすべての希望を吐き出してしまうかのような疲れた溜息だった。
「やはり咎人として生まれてしまったわたくしが悪かったのでしょう。――旅の方。お願いを一つだけ聞いてはいただけませんでしょうか？」
「聞くだけは聞いてやるぞ」
すべての神は願いは聞く。しかし叶えてやるかどうかは神の御心のままだ。
しかし女騎士の願いは予想の斜め上だった。
「わたくしを――殺してください」
「えっ！」
俺は、突然の願いに返す言葉を失った。
驚いた俺をよそに、女騎士はとつとつと言葉を繋いだ。
「わたくしは魔王を倒すため、勇者になろうと思いました。素性を隠して頑張ってまいりました。……しかし結局は咎人。叶わぬ夢でした」

「でも神にささげられるんだろう？　勝手に死んだらまずいだろ」
俺の問いに彼女は首を振った。豊かな金髪が哀しげに揺れた。
「違います。存在するだけの咎人を最後ぐらいは人の役に立てようと、このまま魔王やその手下の餌にされるのです」
「なんだって――ッ！」
俺は《真理眼》でそこらにある供物を見ていった。
【名産の酒】や【名産の果物】に混じって【魔物への食料】や【魔王へのささげもの】が存在していた。
神にささげられた生贄じゃないのかっ！
それに――と俺はこのシステムの完璧さに舌を巻いた。
魔を打ち払う力を持つ光属性を咎人扱いにして、魔物のエサにする。
これが真の勇者とやらが生まれてこない真相なんじゃないのか？
女騎士は、華奢な首にはめられた首輪をほっそりした指先でいじりながら言った。
「この鎖、外そうとしたが外せませんでした。きっとあなたでも無理でしょう。ですから、最後のお願いです。魔物によって慰みものにされてしまう前に――わたくしを、殺してください」
そう言って女騎士は頭を下げた。陽光を浴びた金髪が美しく流れる。
俺は歯を噛み締めて、睨むように見下ろした。
「お前はそれでいいのか？」

「え？」
「魔物にしろ、俺にしろ、ここで死んでいいって言うのか？　それが本当にお前の願いか？」
「わたくしの願い……ですか。――もうすべては終わりです。時間がありません。早くわたくしを殺して、あなたはお逃げください」
「そんなことを聞いてるんじゃない。お前の心からの願いはなんだと聞いているんだ。こんなところで死にたいのか⁉」
「わたくしは――わたくしの願いは――」
その時だった。
メキメキメキと木々の枝を折る音がしたと思ったら、一七八センチある俺より二倍以上高い巨大な男が現れた。全身が岩のような肌に覆われ、足や腕は俺の胴より太かった。
手には車ぐらいもある巨大なハンマーを持っている。
岩巨人とでもいった風体。
そいつは女騎士を見ると汚らしい笑みを浮かべた。
「げへへ……久しぶりに、なぶりがいのありそうな女じゃねぇか。武器は使わず、肉体だけでお前を穴だらけにしてやるぜぇ、げへへ」
女騎士が、悲しげな顔をして叫ぶ。
「ああっ！　逃げてください、旅の方！」
「だから俺のことはどうでもいい。お前の望みを言え！」

しかし女騎士は青い瞳に涙を溜めながら俺の体を押した。
「お願いです！　あなただけでも生きてください！　いつか、いつの日か、勇者さまが現れて魔王を倒すその日まで、生き延びてください！」
「そんな日はこねぇよ！　ぎゃはは！」
バカにした笑い声を高らかに上げて、岩巨人が一歩一歩と広場を踏みしめて歩いて来る。
そして俺たちの傍まで来た。
近くで見ると本当に汚い岩巨人が、俺を見下ろして言う。
「んん～？　貴様はなんだ？　なにをしてる？　お前も生贄かぁ？」
「すまんな。今この女と話してる。……お前は少し待ってろ」
俺はチラッと見ただけですぐに女騎士に目を戻した。
女騎士は子供がイヤイヤをするように首を振る。涙が辺りにキラキラと散った。
「逃げてっ！　わたくしが襲われている間に――」
「お前ってやつは……」
俺は呆れと驚きで感心していた。
――今まさに殺されようとする、こんな状況になっても、自分じゃなく相手を気遣うのか……。
光属性に生まれついただけではない、本当に心から優しい娘なのだと理解した。
すると岩巨人が森を揺るがす怒声を発した。驚いた小鳥が数羽、青空へと飛び立つ。
「てめぇえ！　何者かしらねぇが、この魔王直属四天王の一人、グレウハデスさまを無視すんじゃ

ねぇえぇ!!　死ね！」
岩巨人は巨大なハンマーを振り上げた。
それだけでハンマーの影の下に入り、陽光が遮られた。
「ああっ、逃げて――ッ！」
女騎士が華奢な腕で俺を押した。必死で庇おうとしながら目を瞑る。長い睫毛の端から流れた切ない涙が、白い頬をなだらかに伝う――。

ドゴォッ!!

ハンマーによる強烈な衝撃。
風圧で地面の土が舞い上がり、供物の酒瓶が転がった。
唐突に訪れる静寂。
ぎゅっと目を閉じていた女騎士が、恐る恐る目を開け――そして驚愕で青い瞳を見開く。
岩巨人も驚きで細い目を見開きつつ、腕の筋肉を盛り上がらせて全身をぶるぶると震わせていた。
全力を出しているのがうかがい知れる。
「な、なにぃ!?」
そんなやつの無駄な努力を、俺はしっかりと止めていた。
――指一本で。

やつを下から睨み上げ、低い怒りの声を発する。
「……少し待ってろ――と言ったはずだが？」
きらめくような鋭い眼光。神の威圧。
「ひっ……！」
岩巨人は、とっさに後ろへと飛んだ。恐れすぎたのか広場の端まで後退する。
俺は女騎士に向き直って優しい声で言った。
「さあ、言ってみろ。お前の本当の願いを。今なら何でも聞き届けてやる」
女騎士は驚愕で目を見開いていたが、俺の言葉に端整な顔をふにゃっと崩した。
「うえぇ……お……です。た……くだ……い」
「なんだっ！　聞こえん！　もう一度！」
その時、広場の端まで逃げていた岩巨人が、激昂（げきこう）して走り出す。
「お、おかしな技を使いやがってぇぇぇ！　絶対、許さんぞぉ!!」
どどどと土埃（つちぼこり）を舞い上げて向かってくる。
女騎士はもう一度言う。
「たす……く……。もっと、い……たい」
「もっと大きな声で！」
俺が怒鳴ると、女騎士は体をくの字に折り曲げて、涙を散らして全力で叫んだ！
「お願いです、助けてくださいっ！　もっともっと生きたいですっ！　うわぁぁん！」

女騎士は顔をくしゃくしゃにして泣く。
「よく言った。ただし供え物はいただくぜ」
そう言って俺は、彼女の目の下にたまる涙を指先ですくった。
そして、ふっと顔を緩めて微笑んだ。
右手で腰の太刀を素早く抜き払いつつ、高らかに宣言する。
「汝の願い、聞き届けた！　我が名は蛍河比古命！　必ずや望みを叶えよう！」
抜き放った太刀の上に、拭った涙を滑らせるように塗り付ける。
刀の刃紋が青く輝く！
駆けてくる岩巨人がハンマーを振り上げた。
「しゃらくせぇ！　もう何をやっても遅いんだよ――《死重圧轟鎚》!!」
ブゥンッと風を切って振り下ろされる巨大なハンマー。
振り下ろす速さに柄が弓のようにしなる――。
俺は立ち尽くしたまま、無造作に太刀を持つ。
「蛍河比古命の名に従う、神代の時より流れしあまたのせせらぎよ、一束に集まり激流と成せ――《魔鬼水斬滅》！」
――ギィィッ、ズゥァアンッ!!
鈍い音と、肉を断つ音が広場を満たして、耳を打つ。
俺は太刀を無造作に振り下ろしていた。

目の前の岩巨人はハンマーを振り下ろした体勢のままで固まっていた。
汚い目から急速に光が失われていく。
「な、なぜ……なんで……」
ぽとっぽとっと小さい物が地に落ちる。灰色の芋虫のようなもの。
それは巨人の指だった。
ガランッ！
大きな音を立ててハンマーが落ちる。
その衝撃で、ハンマーの胴も柄もばっくりとまっぷたつに割れた。
そして。
ブシュウ――ッ！
岩巨人の後ろに一筋の血しぶきが上がった。
頭から股間まで真っ二つになったため、ズレながら倒れこんでいく。
ズゥン……ッ。
一番重い音を立てて、岩巨人は倒れて死んだ。
俺は太刀を振って血を払った。
「弱すぎて話にならんな」
それから広場の片隅、ぺたんと座り込んでいる女騎士に近寄った。
無造作に一閃。

キンッと甲高い音が鳴り、首輪と鎖が粉々に砕けた。女騎士の周囲に散らばる。
ゆっくりと太刀を鞘に収めた。
拘束が解けたというのに、女騎士の様子がおかしかった。青い瞳を呆然と見開いたまま動かない。
「大丈夫か？」
俺は赤い唇を可愛く開いている女騎士にさらに近寄った。
すると、いきなり俺の服を掴んできた。
ぐいっと引き寄せられる。
女騎士は俺の腹に抱きつくなり、嗚咽を上げ始めた。
「しゃ……さまぁ……ゆ……さまぁ」
「な、なんだ⁉」
「勇者さまぁ、勇者さまぁぁぁぁ！　――お待ち申し上げておりました、勇者さまぁっ‼」
彼女は火が付いたように泣き始めた。俺の腹に顔を押し付けて、子供のように泣きじゃくる。
「お、おい――」
引き離そうとしたり、立たせようとするが、彼女は子供のようにイヤイヤと首を振って、ただ、ただ声を上げて泣き続ける。
勇者さま、勇者さまぁと口にしながら。
どうにも離れてくれそうになく。
俺は空を見上げて、はあっと溜息を吐くと。

しばらく泣かせるに任せたまま、彼女の艶やかな金髪をぽんぽんと優しく撫で続けた。
真上から温かな日差しの降る昼。
森の広場の片隅で、金髪の女騎士――セリィはようやく落ち着いた。
それでも青い瞳は涙で潤み、細い指先はしっかりと俺の和服を掴んでいる。
逃がす気はないらしい。
彼女は上目遣いで甘えるような声で泣く。
「ぐすっ。……ゆうしゃさまぁ」
俺は困ってしまって吐息を漏らした。
落ち着いたみたいだし、そろそろ言ってしまおうか。
「あー、すまないが。俺はその、勇者とやらになる気はない」
「え……っ！　なぜですか！　こんなにもお強いですのにっ！」
「いや、あいつが弱すぎただけだろう。……なのでお前の願いはもう叶えた。帰らせてもらう」
「何を言うんですかっ！　あの化け物はこの辺り一帯を支配する魔王四天王の一人ですよ！　並のものでは触れることすら叶いません！」
「まじでか。信じられないな」
俺は《真理眼》で広場の中ほどに倒れる岩巨人の死体を見た。
ステータスが浮かび上がる。

【ステータス】
名　前：グレウハデス
性　別：男
年　齢：２８３
種　族：岩魔人族
職　業：魔王軍東方部隊総司令官
クラス：豪魔戦士Ｌｖ99　司令官Ｌｖ３
属　性：【黒闇】

【パラメーター】
筋　力：９００
敏　捷：８５０
魔　力：２８８
知　識：０１４
幸　運：０４０

生命力：８７５０
精神力：１５１０
攻撃力：５３００
防御力：３４５０
魔攻力：０５７６
魔防力：００２８

【スキル】
振り下ろし：単体に大ダメージ
　地割れ：単体ダメージ＋範囲足止め
　爆風撃（ストームウン）：範囲攻撃
　爆砕鉄鎚（ブレイズウェーブ）：範囲＋火ダメージ
死重圧轟鎚（インパクトデスプレス）：範囲即死攻撃
　全能守護（マイティガード）：物理攻撃＆魔法攻撃を無効
叩き落とし：武器を落とさせる
　武器破壊：確率でどんな武器でも壊す

死んでいるので装備が外れている。
しかしまあ、こいつはあれだな、攻撃と防御に特化したタイプだな。
魔防が28しかないので、本来は魔法で倒すらしいが。
――弱い。
こんなので幹部になれるとか。
まあ人間よりは、はるかに強いけど。
ただスキルの説明を読むに、【マイティガード】は攻撃できない代わりに物理と魔法の直接攻撃を絶対に防ぎ、【武器破壊】は確率で相手のどんな武器でも破壊するらしい。
この二つを使われてたら、ちょっとだけやばかった。ちょっとだけ、な。
まあ、そういう細かい戦術を使わせないために挑発をしていたというのもある。
どの道、俺が勝ってただろう。
それに弱いことに変わりはない。
なぜなら――俺は自分の手のひらを見た。
俺のステータスが浮かび上がる。

【ステータス】
名　前：蛍河比古命（けいかひこのみこと）
性　別：男
年　齢：？
種　族：八百万神（やおよろず）
職　業：神
クラス：剣豪　神法師
属　性：【浄風】【清流】【微光】

【パラメーター】
筋　力：５万１０００（＋１０００）
敏　捷：７万１７００（＋１７００）
魔　力：９万１９００（＋１９００）
知　識：２万１２００（＋１２００）
信者数：１

生命力：61万３５００
精神力：56万５５００
攻撃力：10万２０００

防御力：14万３４００
魔攻力：18万３８００
魔防力：４万２４００

【装　備】
武　器：神威の太刀　　攻２倍　魔攻２倍
防　具：神衣の紺麻服　　防２倍　魔防２倍
　　神木の下駄　　行動時敏捷２倍　鼻緒が切れない　勝手に脱げない
装身具：水守のひょうたん　たくさん水が入る　腐らない

――――――――――

文字通り桁が違う。
だからこそ圧勝できた。
これでも神では最低水準なんだけどな。
見てのとおり神にレベルはない。あるのは信者数のみ。
信者一人一人の能力値が神の能力値に加算される。
――お。
信者が一人増えてる！　早速セリィが信者になってくれたのか。
それに、やはりセリィは処女だった。【光属性】の清らかな乙女が信奉した場合、その女の能力値が百倍になって加算される。光以外の処女は＋１００。その他の男女は＋10。
だから悪い神は、よく生娘を生贄に寄こせ、と要求するのだ。
ちなみにアマテラスのやつは能力値一億を超える。
イエスやブッダにいたっては十億超える。
やつらの前では俺なんて蝿に等しい。
俺はセリィを見て言った。
「やっぱり弱いぞ。お前たちだけでも勝てない相手じゃない。他の魔王軍のやつらもそうだろう。……まあ頑張れ。俺は帰る」
「そ、そんな……じゃあ、あなた様は勇者にならずに、いったい何になられるおつもりですか⁉」
「何って――そうだな……俺は神になりたいな」
俺は冗談のつもりでそう言った。
――もう、なれるわけがないのだから。
ところがセリィは可愛く首を傾げたあとで、すぐに「ああ」と笑顔になった。
「神？　勇武神のことですねっ！」
「ゆうぶしん？」
「違うのでしょうか？　勇者として多大な功績を上げた者は、死後、神として祀られるではないですか」
「えっ！」

俺は驚きの声を上げた。上げるしかなかった。
勇者として頑張れば神になれるだと――!?
「た、例えばどんなやつ――勇武神がいるんだ？」
「えっとですね……海の魔王と呼ばれたメテオホエールを筆頭に、数々の海の魔物を倒して海を人の手に取り戻した勇者ラザン。今でも海の守り神としてあがめられてます。ほかには勇者ジャレッドは魔王軍との戦いにおいて戦略を駆使して何度も打ち勝ち、戦神としてあがめられてます。ほかには……」
セリィはあと五人ほど勇者の名前を挙げた。
聞くたびに俺の頬が緩んでいった。
だってそうだろう。
俺にも、できそうなものばかりだったから。
あんな弱い魔物倒しまくっただけで神になれるんだから、たやすいものだ。
日本で頑張るより百倍簡単だ。難易度イージー。
しかも勇者として頑張るだけならこの世界の神が作ったルールに抵触しないはずだ。
――たぶん。
いや、先に了承取っといたほうがいいな。ダメなら高天原に帰ればいいだけだし。
青い瞳を輝かせて歴代勇者を語るセリィを遮って尋ねる。
「この国ではどんな神がいるんだ？」

「え？　あ、はい。神様はいっぱいいますが……」
お、多神教か。一神教じゃなくてよかった。
しかしセリィは様子をうかがうように下から見上げてくる。
「世界のどこにいても主神六柱は変わらないと思いますが……」
そうか！
神の姿が見える上に直接話し合えるから、地球のように国や地域によって違う神が生まれるなんてことがないのかっ！
やばいやばい、と内心焦りつつ言った。
「あ……ああ、少し遠い田舎から飛ばされてきたんでな。この国ではどうなのかと思ってな」
俺はなんとか誤魔化した。
セリィは小首をかしげながらも教えてくれる。
「今いるダフネス王国では、ヴァーヌス教が一番信奉されてます。次に農業を司る大地母神ルペルシアさま、南の海岸地域では船と漁の大海神リリールさまが、あとは大空神アドウォロスさま、太陽神ソラリスさま。隣の国では鍛冶の火神カンデンスさまが一番信奉されてます」
「なるほど。それで六柱いるな」
「ただヴァーヌス神さまだけは、五柱のあとからきた神とされています。魔物を倒して人々を守る神として降臨されました。勇者を遣わされてるのもヴァーヌスさまの御心とか」
「ふぅん――いろいろあるんだな。もう少し、神や勇者について教えてくれ」

「はい、お任せくださいっ」
セリィは流れるような言葉で神話や勇者譚を語った。よく覚えてるなと感心する。頭がいい子らしい。
俺はその間に、神の間で会話するための《心話》――いわゆるテレパシー的なもので連絡を取った。
……しかし！
誰もいない！　呼びかけに答えない。眠りについてるか、この世界から去ったか。
どちらにせよ神が見守っておらず管理放棄されてる世界なら、異界の神が好き放題したって構わない！
念のため街の神殿でいるかいないかの最終判断はするつもりだが、おそらくいないだろう。
俺は顔がにやけるのを必死で堪え、ぐっと奥歯を噛み締めて決意する。
――せっかくこんなイージーモードな世界へ来たんだ！
俺は、この世界で人々に愛される神になってやる!!

セリィはまだ語っていた。今は神と勇者の英雄譚。話に入り込んでいるのか、金髪を揺らしつつ夢見る乙女のように活躍を語っていた。ちょっと可愛い。
静かな広場に鈴のような美しい声が響き渡る。
その彼女の薄い肩に手を置く。びくっと緊張で身を硬くしたのが手に伝わってきた。
俺は詐欺師のような微笑みを浮かべて言う。

「セリィ。さっきのは冗談だ。――俺は勇者に、いや勇武神になってやる！」
「ほ、本当ですか！　ありがとうございます！　さすが勇者さまですわっ」
セリィはぎゅっと抱きついてきた。腕や足は華奢で柔らかいものの、銀の胸当てが結構痛かった。
苦笑しながら彼女の頭を撫でる。
「お前って意外と大胆だな」
「そ、そんなことないです……勇者さまだからです」
セリィはそっと体を離すと、なだらかな頬を染めて俯いた。
俺は真顔になって言う。
「ただし一つ条件がある」
「な、なんでしょう？」
「俺のために、いつまでも清い身でいるんだ」
「えっ⁉」
俺はセリィの細い顎を指先で持ち上げて言った。
「できるな？」
セリィは耳まで顔を赤くして青い瞳を潤ませている。
「……はい。勇者さま。わたくしは、あなたさまに、この身をささげます」
「いい心がけだ」
俺が手を離すと、セリィは切ない声で「はぅっ」と呟いた。

俺は腕を組んで悩みながら言った。
「それにしても勇者さまはやめてもらいたいな。うーん、そうだなセリィ。ケイカと呼んでほしい」
「わかりました、ケイカさま……って、わたくし、自己紹介しましたでしょうか？」
「あ！　……ああ、名前は言ってた」
「そうでしたか。ではあらためて紹介させていただきますね。わたくしはセリィ……です。騎士です。北西の生まれです……以上、です」
歯に物の挟まったような言い方。
広場の上を奇怪な鳥が、ギエーギエーとバカにしたような鳴き声を上げて飛んでいった。
俺は半目になってセリィをにらむ。
「ああ、そうなのか。勇者さま、勇者さまとおだてながら、結局は隠し事をするんだな」
「うぅ……ごめんなさい、ケイカさま。その、家庭の事情が……」
「まあ、なんとなくわかるよ。高貴な身分なんだろう？」
「ど、どうしてそれを！」
「まあ、装備とかでなんとなく、ね。高い能力の装備をわざと弱く見せかけていたから」
「さすがです、ケイカさま」
そう答えるセリィの声は敬意の念で満ちていた。
しかし俺は、う～んと唸ってしまう。
本当の理由はステータスを直接見たからだった。

騎士としてはＬｖ５だったが、正体不明の職業とクラスがあり、それがＬｖ17だった。年齢も17。つまり年齢で自動的に上がっていく職業とクラスだと思われる。
それはもう王女や王妃など、生まれ持った血筋に関わる職業でないとおかしかった。
――しかも五文字。おそらく『プリンセス』だろう。
逡巡するセリィに微笑みかける。
「まあ、いろいろな事情があるし、話も長くなりそうだ。それよりもまずは勇者にならなくてはな」
「はい、ケイカさま……近いうちに必ず、お話しします」
「わかったよ。それで、俺は遠いところから来たばかりでこの国の仕組みがわかっていないんだが、どうすればいい？」
「勇者になるにはまず、勇者試験を受けてダフネス国王から認定してもらい、勇者のメダルを手に入れなければなりません」
「なるほど。勝手に名乗っては意味がないのか。まあ、そりゃそうか。神にまでなれるんだし。
――その試験はどこで受けられる？」
「ダフネス王国の王都クロエで受けられます」
「よし。まずは王都へ行こう」
「はい。ご案内します」
セリィが先に立って歩き出す。腰までの金髪が豊かに揺れる。
しかし、彼女の凛と伸ばした背中へ向かって俺は呼びかけた。

「ちょっとまて。この森を歩いていくのか？」
「はい？　そうですが――あ！　四天王の首を持って行かれますか？」
彼女は頬に手を当てて、何気なく小首をかしげた。そういう仕草が意外と可愛い。
それは置いといて。
俺は少し考えた。
四天王の首を持っていけば、表面上は厚遇されるに違いない。
しかし『咎人』などというシステムを国家制度に組み込んでいる相手だ。
この魔王は想像以上に狡猾で残忍に違いない。
うかつに目立つことをすると魔王に目をつけられることになる。
裏から手を回されて勇者試験で落とされる……なんて可能性も否定できない。
また魔王自ら俺を処分に来る――なんてこともありうる。
もちろんそうなったら簡単に倒せるだろう。
――しかし。
はたして魔王を倒しただけで皆にあがめられる神になれるだろうか？
さっきのセリィの話を聞いていて思ったが、苦労に苦労を重ね、困った人々をコツコツと助けているからこそ、最終的に人々の支持を得られたのだ。
人間は忘れやすい。
三年たてば恩など忘れる。

そうさせないためには、何度も何度も恩を売らなくてはならない。
俺が日本で失敗した最大の理由がそれだった。
名前をコツコツ売ることをしなかった。
千里の道も一歩から。
やはり、同じ間違いは避けるべきだ！
俺は首を振って言った。
「首を持っていくのはやめておこう。まだ勇者ではないものが成果を挙げたら、いらぬ疑いをかけられる」
「そ、そうですか……ケイカさまがそう言われるのでしたら」
「それに呼び止めたのは、違う理由だ」
「なんでしょう？」
「この森は広大だぞ。食料が手に入らない可能性もあるから、ここにある物を持っていこう。どうせやつは死んだのだから」
するとセリィが、ぱあっと顔を輝かせた。
「そうですね！　すっかり忘れていました！　ついごはんは当たり前にある物と思ってしまって……。いえ、なんでもありません。では、持って行きましょう」
苦労を知らぬ王女様のような言葉だったが、俺は気付かないふりをした。
そして俺たちは食料を選んだ。

上級の食材や、日持ちのしそうな食材など。《真理眼(しんりがん)》で見れば簡単にわかった。
それから、ひょうたんの水筒にも水をたっぷりと補給する。
本当は魔法で一気に飛んでいくこともできたが、今は強いだけの人間としておきたい。
あと、彼女からこの世界のことをもっと教えてもらいたい。
それにはのんびりと歩きながらの会話が好都合だ。
それからグレウハデスの死体を魔法で溶かして処分した。あらぬ疑いを避けるため。
俺たちは供物の袋を鞄(かばん)代わりにして、数日分の食料を持った。
「準備はいいな？」
「はいっ、ケイカさまっ」
セリィは完全に信頼しきった晴れやかな笑顔で、俺に答えた。
そのまっすぐな心に気後れしつつも、俺とセリィは深い森の中を楽しげに会話しながら歩いていった。

試し読み版はここまで！
続きはＧＡノベル「勇者のふりも楽じゃない――理由？ 俺が神だから――」
でお楽しみ下さい！　10月15日頃発売！